

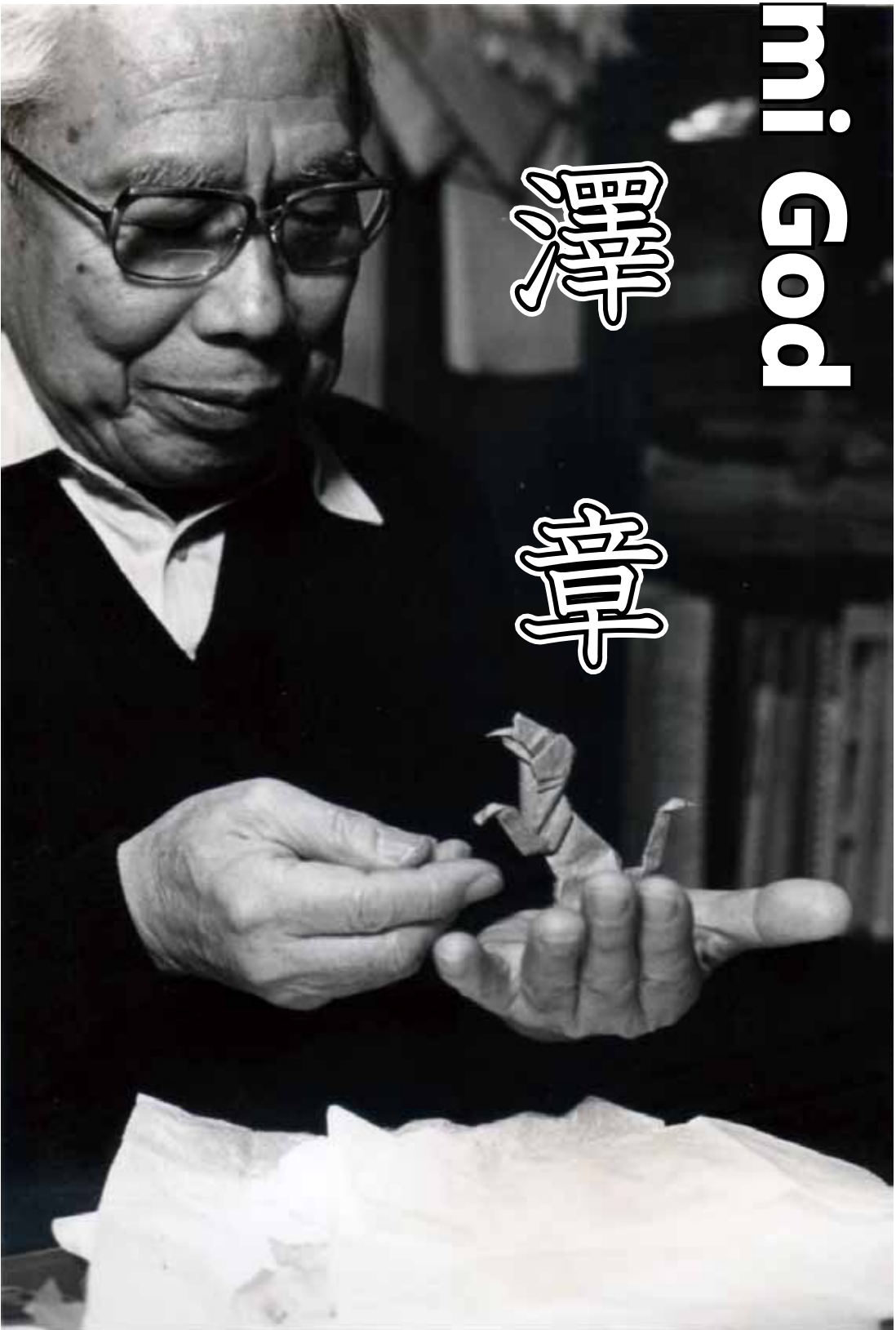
小中学校学習教材「中学校版」

Origami God

吉

澤

章





目次

〔本編〕

一	折り紙との出会い	……	1
二	激動の青年期	……	2
三	飛躍の糸口	……	4
四	レグマンとの出会い	……	6
五	世界へ羽ばたく	……	8
六	Origami God	……	11

〔資料編〕

一	かやら草	……	14
二	世界をめぐる	……	16
三	作品「セミ」	……	17
四	作品「キヤピトルの狼」	……	19
五	折り紙の起源	……	20
六	吉澤章と創作折り紙 (吉澤章の言葉から)	……	22
七	外国の方との交流	……	23
八	折り紙作者の声	……	25

〔作品編〕

27
）
30

一 折り紙との出会い

章は、一九一一年（明治四四年）上三川町の下町で、父團治、母セイの子として、大勢の兄や姉に囲まれ生まれました。小動物や鳥、虫たちがあたりを飛び交い、近くには魚影の色濃い小川があるなど、緑豊かな自然の中でのびのびと育ちました。

この時代、世間全体が豊かではなく、子どもも農業の手伝いをする時代でしたから、兄や姉たちは学校が休みのときに家のお手伝いをするため、なかなか兄弟そろって遊ぶ時間はありませんでした。でも、雨の日には手伝いもなくて、兄弟一緒に遊べるので、章にとっては雨の日はことさらに楽しみでした。兄たちと軒下のきしたに集まっては、雨だれのところにかかると入れてぐるっと回し、きれいなお皿を作る競争をやったり、夏にはそのくぼみに明かりを募もって飛んできたカミアゲムシをすくい上げては、コップに入れて集めたりなど身近な自然を思う存分楽しんでいました。

ものを作ることも大好きで、お蕎麦やうどんを作る時になると、お母さんのそばに行き、粉を練って作るその切れ端をもらい、今でいうところの粘土細工のようにチョウチョやカエルを形作り、棒に刺して囲炉裏いりで焼いておやつ代わりにして食べていました。貧しいながらも、とても牧歌的な日々を過ごしていました。

章と折り紙との初めての出会いは、四歳の頃でした。近所のお姉さんが新聞紙で舟を折って、章にプレゼントしてくれたのです。意気揚々と家に持ち帰ったのですが、兄たちと舟の奪い合いなり、終いに舟は壊れてしまいました。章は悔しくて、何とか元に戻そうと、その晩一生懸命折り直しました。でも、上手いかなかったのです。

しかし、このことで章は一枚の紙から形作られる創造の世界に興味を抱くようになりました。それから、雨の日になると、仲直りした兄や従兄弟たちと、雨戸を少し開けて、薄明かりの縁側で新聞を切つては、いろいろ折ってもらったり、それをまねて折ったりするようになりました。

章は、豊かな幼年期を経て、家からほど近い上三川尋常高等小学校に通うようになりました。学校に行く途中では、家でとれた牛乳を、近くの家々に届けてから小学校へ行くのが日課でした。当時の上



1950年代の作品 野原で遊ぶウサギの親子

三川小学校は、新しい時代を先取りした自由教育の気運に満ちあふれていました。どの教科も好きでしたが、特に「手工科」の時間がお気に入りでした。「手工科」は文字通り手先を使って工作をする科目で、ヒゴや粘土、石膏、折り紙などを細工してものを形作ることを学ぶ教科です。紙はまだ高価な時代でしたから、章は先生から配られる美濃紙や染め和紙を、折っては形を作り、また開いては違う形を作りと、何度も何度も繰り返して使っていました。この学習から、土や竹や紙といった自然の素材が、手を通して人為の形へと生まれ変わっていく造形の奥深さに、章は夢中になりました。

二 激動の青年期

一九二四年(大正十三年)、章は十三歳になりました。実家が貧しかったこともあって、小学校を卒業し、姉の嫁ぎ先である東京は虎ノ門の洋服店に奉公に出ました。身には、身の回りのものと折り紙用紙を入れた柳行李一つでした。奉公先は理解のある家で、章は、奉公の傍ら、数寄屋橋にある泰明実業補習学校の夜学に通わせてもらいました。学校では、学問の大切さ、素晴らしさを改めて知りましたが、その間も折り紙用紙は肌身離さず、暇を見つけては折り続けていました。

しばらくして、章は実家の生活が困窮したこともあり、十六歳で第二の奉公先となる大森の酒屋に勤めることになりました。章自身も、奉公でもらったお金はほとんど実家に送るような貧しい生活を送っていました。よく働き、主人や得意先に可愛がられていました。お得意先には学校の先生や知識人の方などもあり、そういった方に家の中に招き入れられ、時間を忘れて話をうかがったり、章の勉強好きを知った方からは哲学入門や概論の本などを貸していただきました。ある日訪れた家で、床の間に「月を蹴る鍾馗様」の掛け軸を見かけ、時間を忘れてその絵に見入っていました。すると、章は家に帰って



1950年代の作品 ウサギの縄跳び

美濃紙

岐阜県美濃地方で作られる和紙

柳行李

柳で編んだ箱形の入れ物



奉公

他の家に雇われ家業などに従事すること



からその掛け軸を思い浮かべながら、紙で今見てきたお月様や鍾馗様を、レリーフ的なものに創り上げていきました。章の折り紙への愛情は益々深まるばかりです。

一九三二年（昭和七年）、章は二十一歳になり鉄工所で働くようになりました。前年には中国との争いが始まり、不穏な空気が国全体を覆っていました。そしてとうとう戦争に入ると、少年たちの労働力も必要になったことから、多くの少年が章の勤める鉄工所で働くことになりました。章は、少年たちの教育係と彼らが住む寄宿所の監督を務めるよう命じられました。彼らが仕事に馴染むことができるよう、時には、金物でおもちゃと一緒に作って遊ぶなどしていました。遊びとはいえ、グラインダーや機械のこぎり、ヤスリがけ、と鉄工所の仕事の基本技術が入っているのです。少年たちは次第に仕事に興味を持つていきました。

ところが、ようやく機械が使えるようになって、少年たちは設計図の青写真を読めないのです、失敗作が続出しました。それは、設計図を読むのに必要な立体幾何の知識をもった子がほとんどいなかったからです。そこで章は、「折り紙で少年たちに幾何学を教えられないか。」と考え、所長に提案をしました。所長の快い賛同を得て、夜宿舎に帰ってからの授業が早速行われることになりました。少年たちは皆、食い入るように章の手元を見つめながら、新しいことを知る喜びで熱心に学び取ろうとしていました。章は、改めて教育の大切さを知り、自らもさらに学びを深めたいとの思いを強くしました。それから、文部省の先生方に手紙を出し続け、とうとう手工科の本をたくさん出して高名な先生にたどり着きました。章は、忙しい合間を縫って、講義に耳を傾け、習ったことを紙に書き連ねました。このとき得たつてを頼りに、その後、様々な先生を訪ね歩き、冶金学や人間工学、またセザンヌの絵画理論についても学ぶことができました。章の折り紙に対する見方はこれまでよりも奥深くなり、折り紙をより本格的に研究していくようになりました。しかも、創作した折り紙ができあがるたびに作品を知人に送り、自分で新たに考えた折り方の解説などを喜々として行うのでした。

寄宿舎

働く人が共同生活するための施設

グラインダー

砥石（といし）を回転させて金属を磨いたり切ったりする工具

幾何学

図形や空間の性質について学ぶ学問

冶金学

鉱石から金属を採取し、精製・加工する金属工学

セザンヌ

フランスの画家
近代絵画の父と称される

しかし、鉄工所勤めの無理がたたったのか、章は病にかかり、郷里の栃木県にもどることになってしまったのです。一九四一年（昭和十六年）のことです。一年ほど休養しなければなりませんでしたが、その間には、東京で得た多くの知人を通じ本多功とも親交を重ねるようになりました。本多は、海外でも折り紙作者として高名な方で、その本多から自身が著す本に「吉澤章さんの作品も使わせて欲しい」という依頼を受けることになったのでした。章は、ヨット、孔雀、六角花形、組み合わせ菱形などの創作折り紙を提供し、これらが一九四四年に出版された本多功の著書「フリガミ手工」でも紹介されました。

体も癒え、体調も戻ってきたのですが、ほどなく章は軍に召集され、それから一年近く医療部隊の一員として中国に赴くこととなりました。やがて、終戦を迎える少し前に軍役を終えてからは、栃木県の南那須に住居を構え、佃煮の行商で生計を立てながら、時間の空いたときには創作折り紙に没頭する日々を過ごしていました。また、時には近所の子どもたちを連れて山歩きをするなどもしていたようです。木々の梢の間を四十雀、山雀、小雀など多くの小鳥が飛び交う様子を見て、折り紙で形を作るだけでなく「盆景」のように折り紙と景色の融合した世界を構築したいという思いが募りました。章は四十になり「これからは折り紙一本で生活していこう。」と決心しました。

三 飛躍の糸口

一九五〇年（昭和二十五年）、章に大きな転機が訪れました。戦後の教育界では、民主主義のもと、創造性が重視されるようになっていました。そんな折り、章が取り組んできた創作折り紙の存在が栃木県教員組合の中で話題に上ったのです。すると教員組合が中心となって、章を講師とした県内での大



1950年代の作品 木に集まるフクロウや鳥たち

本多功

千葉県船橋市出身
日本伝統折り紙の
祖と言われる

盆景

お盆の上に土や
砂、石やこけなど
を配置し自然の景
色を作ること

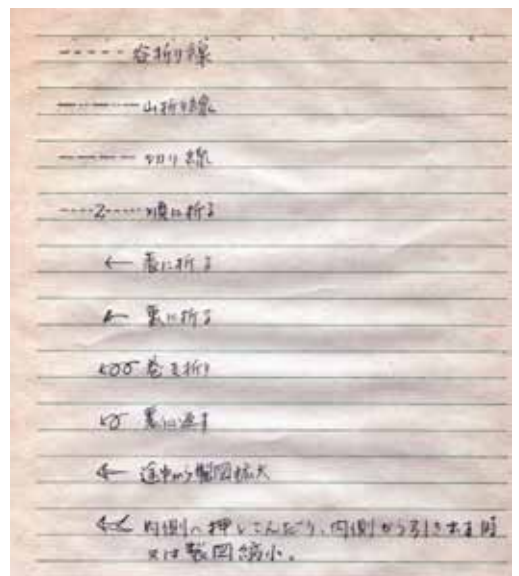
規模な講習会が実施されることとなりました。教育的美術造形としての折り紙の発表です。その講習会を見た人が仲介し、当時「アサヒグラフ」の編集長だった、劇作家の飯沢匡に会うこととなりました。でも、これまで貧しい生活をしてきた章は、面談の場にもみすぼらしい身なりで出かけざるを得ませんでした。飯沢に会うなり、「こんな恰好で申し訳ありませんが、これしか着るものがないんです。でもわたしは折り紙を折らなければならぬので、どうかお許しください。」

丁寧（ていねい）に謝（あやま）る章の真摯（しんし）な態度と人柄に、飯沢は感動を覚え、折り紙に対する章の情熱をひしひしと感ずるのでした。章が持参した作品の数々から、既成の折り紙とはまったく違ったその素晴らしさを感じ取った飯沢は、章にアサヒグラフに掲載する干支（えと）の十二体の動物の創作を依頼することとなります。章は、この申し出を受け、仕事（しごと）がしやすい環境の東京に住まいを移して、昼夜を問わず作品を完成させるため折り紙づくりに取り組みました。そしてとうとう作品が完成し、一九五二年一月号の「アサヒグラフ」に章の作品は掲載されたのです。これにより、吉澤章の名は一躍脚光（いちやくきゃくこう）を浴びることとなりました。その後も飯沢は何かと章の力になり、東京銀座のギャラリーでは日本で初めての吉澤章の展覧会が開催されました。

一九五四年（昭和二十九年）、ユネスコ主催（しゆさい）の美術工芸教育国際会議では、日本の伝承折り紙は模倣（もぼう）であり、学術（がくじゆつ）価値（かち）の少ないものと批判を受けていました。章はその会議に参加し、自身の創作折り紙を席上で実演しました。章の手から生まれる創造性あふれる作品たちは、参加した人々に感動を与え、折り紙のもつ創造性を世界各国に知らしめたのです。章は、

「文部省の先生方が私の出席を勧めてくれたんです。電車賃もない時代で、製図用のコンパスを質に入れて会議場に通ったものです。」
と、このときのことを語っています。

同年には初めての著書「新しいおり紙藝術」を刊行（かんこう）しました。この本で示され



折り方の図の表記法を記したメモ（1950年代）

た点線と矢印を使用した折り方の図（折り紙の折り方と折り方の全行程を表した図）の表記法は、現在も国際的な標準となっており、たいへん画期的な本でありました。この本の中で章は、「この心ひかれる折り紙という芸術を通して世界の平和を確立する。」と自分の信念を記しました。章はそれまで自身が主催していた「おりがみ友の会」を、折り紙の世界的普及を願った「国際折り紙研究会」として新たに設立し、自らの思いの実現に向け進んでいこうと決意を固めました。

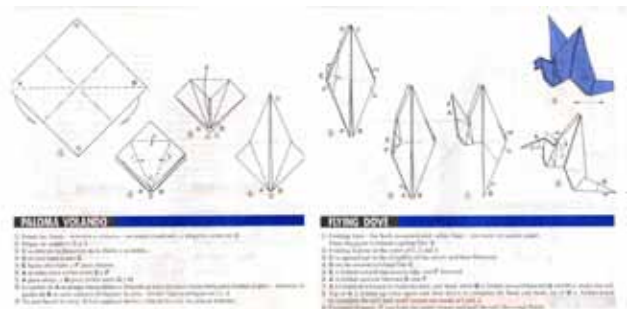
四 レグマンとの出会い

一九五三年（昭和二十八年）に、アメリカの民俗学者であり折り紙研究家のガーシオン・レグマンから章のもとに、『「カノマド」という日本の古書を探して欲しい。』という依頼が舞い込みました。章はレグマンの申し出を受け、この後「カノマド」の所在をめぐって日本中を探すこととなります。実際、探し始めてから約十年の後「カノマド」は「かやら草」として無事発見されることになりましたが、このレグマンとの出会いや交流が、章にとつては国際的にも大きな飛躍をもたらしました。

余談になりますが、章はレグマンと何十通もの手紙や作品のやりとりをしました。章の生活費のほとんどが、こうした切手代や郵便料金に化けてしまうほどでしたから、生活は苦しいままでした。レグマンは、章の創作活動を支援するため、時折海外から章



ガーシオン・レグマンから吉澤章に送られてきた手紙



鳥の折り線、折り方を示した図とスペイン語での説明

ユネスコ
世界の193の国々が加盟し、教育・科学・文化を通して豊かな社会を作るための活動をしている機関

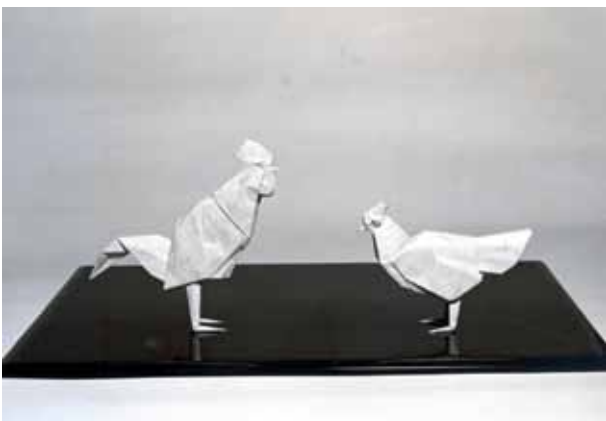


に資金援助を行う一方、レグマンの元に送られてくる創造性あふれる作品を見たり、さらに銀座で行われた章の展覧会の成功を聞いたりする中、海外で章の創作折り紙の展覧会を開催できたらどんなに素晴らしいだろう、と考えました。

レグマンの尽力もあり、一九五五年（昭和三十年）オランダのアムステルダム市立美術館で、章の創作折り紙の展覧会が一月間にわたって開催されることになりました。当時、第二次世界大戦の敗戦国である日本の立場は、国際的にも良いものではありませんでしたが、この展覧会で見せた動物や人物の精巧な作りは造形美術として高く評価され、多くの海外の方々に喜ばれました。

そして、この様子はメディアを通じて欧州や北米、南米に瞬く間に発信されることとなりました。この時の現地の状況を見た当時の在オランダ大使の岡本季正は、章に展覧会で受けた感動と喜びを綴った礼状を送りました。同時に政府には、吉澤章の展覧会が戦争によってもたらされた日本への負の感情を和らげ、オランダと日本の良好な関係を育むのに役立ったと報告をしました。

オランダでの展覧会の成功により、一気にヨーロッパや北米、南米の折り紙作家と章との交流が広がりました。「折り紙」が「ORIGAMI」として飛躍する大きな第一歩でした。その中には、後のイギリス ORIGAMI 協会の会長となるロバート・ハービンやアメリカ ORIGAMI 協会を創設するリリアン・オッペンハイマーも含まれていました。彼女はこの記事に触発され、日本にいらる章を訪ね、アメリカでの展覧会の開催を申し出るようになります。



1950年代の作品 雄鶏と雌鶏

五 世界へ羽ばたく

一九五六年(昭和三十一年)、章は菊川喜代と結婚しました。この後、章の名が広まるにつれ、多くの国々から招聘を受けたり、多くの国の人たちと連絡や折衝をしたりしなければならなくなります。章が折り紙創作に力を注げるよう、いつも喜代夫人が支え続けました。章と喜代夫人は二人三脚でこれからの時代を駆け抜けていくことになりました。

オランダでの展覧会の活躍を伝え聞いた当時外務省課長の伊達邦美から、章のもとに、海外での折り紙を通じた文化交流の話が持ちかけられました。国は、章の生み出す作品が新たな造形美術として世界と日本との架け橋になると期待したのです。

季刊「民俗学」に、章は次のように言葉を残しています。

「オランダのアムステルダム市立美術館において、前から文通のあった民俗学者G・レグマン氏と親日家のF・チコチン氏のご尽力により、私の折り紙の展覧会が一ヶ月間開催されたのは一九五五年のことでした。

この展覧会のニュースはヨーロッパはもとより、南北アメリカに広く反響を呼び、その後ニューヨークのクーパーユニオン美術館でも『幾何学と折り紙の装飾的な試み』と題して、私の作品を主に、世界の折り紙愛好家の作品の展覧会が催されました。それまでスペインのウナムノ折り紙がヨーロッパ方面に若干行われておりましたが、画期的な紙造形として、私の折り紙が世界から迎えられるようになってきました。

こうして創作と研究に地味な歩みを続け、いろいろ要望にお応えして作品を提供し、資料を送ったりしていました。その折り紙を海外の人々に直接お伝えする機会が与えられました。外務省や国際交流基金から、新しい美術の分野としての折り紙を広め、文化交流に役立てるよう、数次にわたって世界各国に派遣されました。日本の伝承折り紙の鶴や奴さんでは何もわざわざ派遣することはないので、あなたの新しい折り紙を紹介して欲しいと言っていただきました。



AKIRA YOSHIZAWA

Akira Yoshizawa model
"Squirrel Monkey"



Akira Yoshizawa is undoubtedly the world's greatest paper-folder, and his inspirations are many. Certainly, most paper-folders base their creations on principles or procedures originated by this remarkable man.

At his home in Tokyo, Akira Yoshizawa folds continuously and has created some thousands of almost unbelievable figures. Many of his creations are to be found in Japanese magazines, as well as in the three books he has published.

吉澤章の紹介文 (アメリカ)



A paper zoo from the Cooper Union exhibition.
BADGER, LION, OSTRICH, GOSHU, and MONKEY by AKIRA YOSHIZAWA.
GRAFFIE by GEORGE RHOADS.

アメリカのクーパーユニオン美術館での吉澤展示作品

初めて私が派遣された国はオーストラリア、ニュージーランド、インドネシアでした。広大な緑の広がり、ヒツジやウシの群れを見ながら降り立ったシドニーで、その日のうちに予定された私の外国での最初の講演は、師範学校で行われました。折り方の理論と折り方の実習を、学生は熱心に受講してくれました。紙をひと折りすることで、たちまち親しみが湧くのは折り紙の持つ不思議な魅力です。

そこには私の好きな動物がたくさんいます。カンガルーやエミュー、コアラ、カモノハシ、それにヒツジやウシ、ウマなどを折って大変歓迎され、テレビの出演には折り紙の動物たちが大うつしにされました。

ニュージーランドでは空港に迎えてくださったジャパン・ソサエティの会長から、コインにデザインされているキウイを折り紙でできないかと言われて、即座に創作したところ、早速翌朝の新聞に紹介されました。

ハンディキャップ・センターでは子どもたちの部屋に案内されたところ、付き添いの先生が、寝たきりの子どもたちにもいる紙を配られました。その子どもたちは片方の手と口を使って、ひと折り折るのになかなか大変でした。すると、そばにいた子どもがつつと歩み寄って、自分の片手を添えて二人で一つの紙を折ってゆきました。それはただ嬉しいものですが、ごく自然に助け合っている姿に、例えようもない尊い驚きを感じました。」

国の派遣を契機に諸外国からの招聘も相次ぎ、章は三十年間でオセアニア、欧州、アジアの四十数カ国を回りました。その間も自らの新たな創作折り紙の研究を続け、同時に「折り紙読本」や「たのしいおりがみ」を始め多くの著書を刊行しました。そして遂には、一九九二年（平成四年）に、スペインのセビリヤで開催される万国博覧会での日本政府の出品として、章に白羽の矢が立ったのです。

章は、日本政府館に「日本の四季」という作品を出品しました。日本の原風景をテーマに表現した折り紙の作品総数は千点にも及び、多くの来場者の感動を呼びました。入館者アン



1960年代 外国で折り紙の講習会をする様子

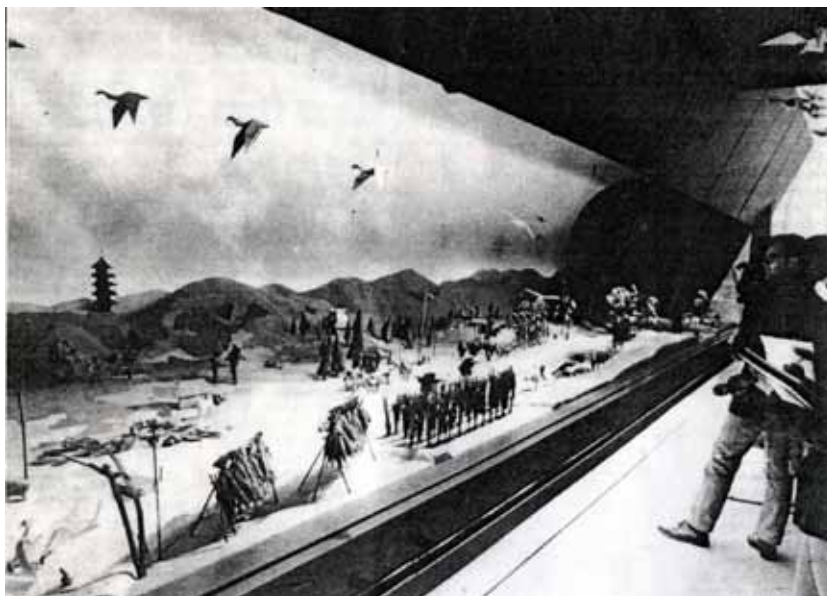
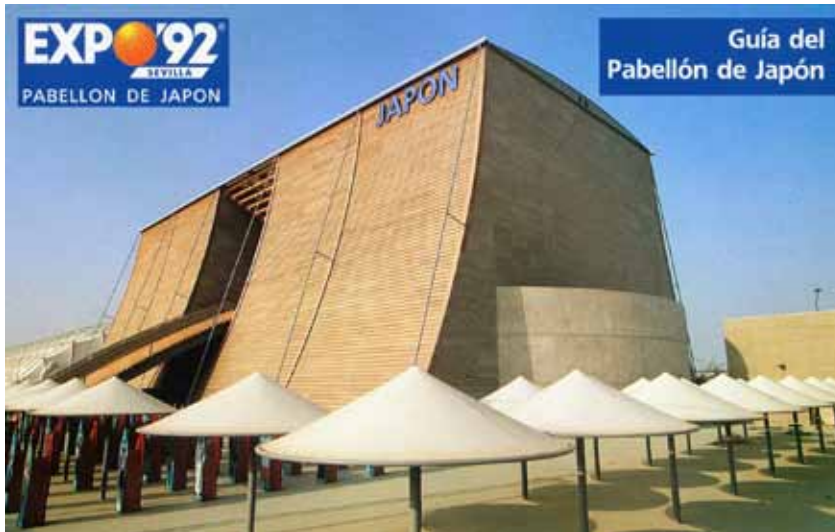


1950年代の作品「カンガルー」

ケートでも、参加百三十か国中で、圧倒的一位という人気でした。

章は、このセビリア万国博覧会の席上、集まった人々に次のように語りかけました。「折り紙は一枚の紙の面と線の屈折によつ

て表現する造形の詩です。私の折り紙は自然物を写実、または具象形として、心象を抽象的に表現します。それは遊びのよう
な易しい折り方から、格調の高い芸術作品にもなります。このセビリア万博に、日本古来の文化『生なり』の表現を日本館展示の意図により、四季の原風景を折り紙で構成しました。私の心の中に承り継がれて来た感性から、独創的な作品が生まれました。情緒豊かな折り紙にもユニークな発想の根元が秘められ、未来の科学や技術に役立つことでしょう。世界の皆様に折り紙によって展開される日本の四季を楽しんで頂きたいと思います。」



1992年セビリア万国博覧会で展示された「日本の四季」(スペイン新聞記事から)

生なり
生地のままで飾り
気のないこと

六 Origami God

章は、創作折り紙の第一人者として世界中の折り紙界から、「Origami God」「Masters of Origami」と称されるようになりました。その功績は日本でも高く評価され、一九八三年（昭和五十八年）には折り紙による文化普及に尽くしたことで勲五等雙光旭日章を叙勲し、一九八六年（昭和六十一年）には外務大臣賞を受賞することになりました。

二〇〇三年（平成十五年）九月二十四日、章は念願叶って生まれ故郷の上三川町で作品展を開くことになりました。会場は約八百点もの作品で埋め尽くされ、多くの観客が連日押し寄せました。章は新聞のインタビューに、「生まれ故郷で作品展を開きたかった。うれしい。」と、目に涙をためて語りました。

宇都宮・県央

上三川

吉沢さんの創作折り紙展

入場者1万人を突破

【上三川】上三川の衣園亭自らの作品展の入り、二十四日までの期間料品店「大黒屋」二階で場者が十一日、二万人を中に入場者になり、多くの来場を九月二十八日から始まり、突破した。作品展実行委な創作折り紙作家・吉沢 章さん（委員長・関根樹町）と、東京都練馬区大泉学園は「当初の目標を九千九百七十八人に達しており、実行委員は二万人達成用のくす玉を準備。十一日午前十時半ごろ、宇都宮市平松本町から訪れた上野ミツノさん（ごら同）市内の主婦三人のグループが一万八千人となり、関根委員長らとともにくす玉を割って祝福した。



1万人達成のくす玉を割る宇都宮市内の主婦や実行委員のメンバー

実行委員から花束や吉沢さんのサイン入り著書を贈られた上野さんらは「新聞で作品展を知りま

した。館内の時に来場できてとてうれいす」と声を弾ませていた。入場者の大半は県内だが、インターネットなどで知った北海道や滋賀県、大阪府など県外のファンも多く駆け付けているという。コリラやペンギン、恐竜などの展示約八百点のうち、「十二支」など一部の作品を新たに入れた。観覧料は無料。会場は午前十時から午後六時まで。十日は会場で折り紙講習会も開かれる。問い合わせは大黒屋 ☎02885・566・201へ。

2003年10月12日 下野新聞記事

2003年9月27日（土曜日）

いのちの折り紙展

「いのちの折り紙展」は、折り紙を通して命の大切さを伝える。会場には、折り紙で作られた様々な生き物の作品が展示されている。観覧料は無料。会場は午前十時から午後六時まで。十日は会場で折り紙講習会も開かれる。問い合わせは大黒屋 ☎02885・566・201へ。

世界的作家 ぜひ地元で

世界的作家の折り紙展が、地元の上三川町で開かれた。会場には、折り紙で作られた様々な生き物の作品が展示されている。観覧料は無料。会場は午前十時から午後六時まで。十日は会場で折り紙講習会も開かれる。問い合わせは大黒屋 ☎02885・566・201へ。

2003年9月27日記事

二〇〇五年（平成十七年）三月十四日、章は奇しくもこの世に生を受けたのと同じ日に、折り紙に全てを捧げた生涯の幕を閉じました。九十四歳でした。

章の訃報は、瞬時に世界に打電されました。日本のメディアはもちろんのこと、海外の新聞も章への哀悼と偉大な足跡の記事を一面を使って取り上げました。

章の死後、妻の喜代夫人、また喜代夫人の妹、菊川多美子を中心とした国際折り紙研究会のメンバーは、吉澤創作折り紙を多くの人々に伝承したいと考え、国内はもとよりオーストラリアやドイツ、アメリカ、イスラエルなどで積極的に講演会や講習会を実施しました。今もその活動は続けられています。また、二〇一二年の三月十四日には、章の生誕百一年を記念し、Googleのホームページが折り紙バージョンとなりました。

「この心ひかれる折り紙という芸術を通して世界の平和を確立する。」そう語った章の夢は、今もまだ続いています。



イギリス「タイムズ」で吉澤章の業績を紹介



「花まつり（おしゃかさま）」



吉澤章と喜代夫人



「マンモス」

一 かやら草

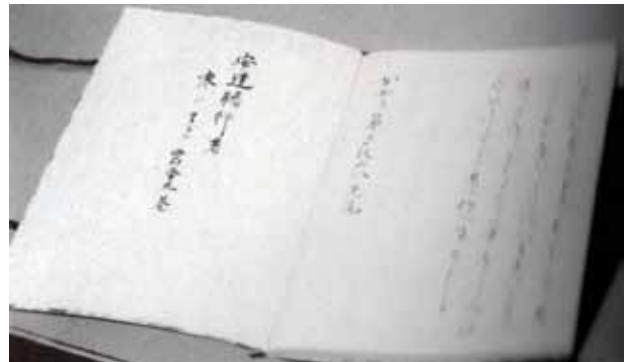
かやら草は、本編の中でも少し触れましたが、江戸時代の折り紙文献で歴史的価値のある資料です。ここでは、発見に至る経緯と、アメリカで発行された書物にある前書きを載せました。

(一) 発見に至る経緯

大正の終わり頃、アメリカのシカゴ大学のフレデリック・スーター博士が、朝日新聞社大阪本社に保管されていた折り紙のことを記した古い書物から、折り紙の関係部分を書写させて持ち帰った。博士は、一九二二年発行のアメリカ向け雑誌に、この書物の写しから「蜻蛉とんぼ」の折り方と他の若干の資料を掲載した。このとき、書かれてあった日本語からこの原本が「カノマド」として、世界中の折り紙愛好家に知られることとなった。

一九三三年に博士が亡くなったあと、このときの写本も、また、大阪本社にあるはずの原本も所在が分からなくなり、研究者の間では「幻の本」として話題になっていた。

一九五三年（昭和二十八年）に、アメリカの民俗学者であるG・レグマンをはじめ、世界の国から朝日新聞にこの「カノマド」の照会が何度もあったが、やはり発見に至らなかった。何度も同じやりとりをしていた中、レグマンは、「アサヒグラフ」の記事が出、折り紙作家として世界に名が届くようになった吉



澤章のもとに「この原本が大阪の朝日新聞社にあるので探して欲しい」という依頼を送った。

吉澤章は、レグマンの申し出を受け入れ、東京から大阪に足を運び大阪朝日新聞社に問い合わせをした。生活費が苦しい中、その後も幾度となく大阪を訪れては、調査部の図書室を探したり、古典の蔵書の多い図書館や古書店を尋ね歩いたりしていた。

一九六四年（昭和三十九年）、新聞社調査部で棚上げの中の古書を移転のために整理していたところ、「何哉等草」と記された資料集の中に、長い間埋もれていた「幻の本」を発見することとなった。この一報は、直ちに吉澤章に知らされ、求められていたものかどうかの確認が成された。果たしてその発見に吉澤は歓喜し、早速レグマンに発見の一報を入れた。

この「何哉等草」は、著者が足立一之と書に記されており、約二百三十二冊の書で構成されている。一巻には「何哉等草」と表記されているが、二一巻からは「斯哉等草」以下「加家良草」「歟哉等草」「佳家良久佐」などと記されている。このうち二十七巻と二十八巻に、スーター博士が写した折り紙関係の記録が残されている。では、なぜこれが外国で「カノマド」

又は「カンノマド」として広く知られるようになったかという
と、この「かやら草」の五十一巻に「冬の窓」と記されたも
のがあり、これも巻を進めていくと「何哉等草」と同様に、
「富勇廻麻戸」「冬の窓」などといくつか別の表記も記されてい
る。これらの中で海外で「寒」という漢字と間違えられ「カノ
マド」は「カンノマド」と知られたのであろうと推測される。
〔季刊 をる〕参考)

(1) 「A Japanese Paper-folding Classic」に記された前書き
(英文を和訳したもの)

本書は、これまで失われてきた折り紙の古典を紹介していま
す。

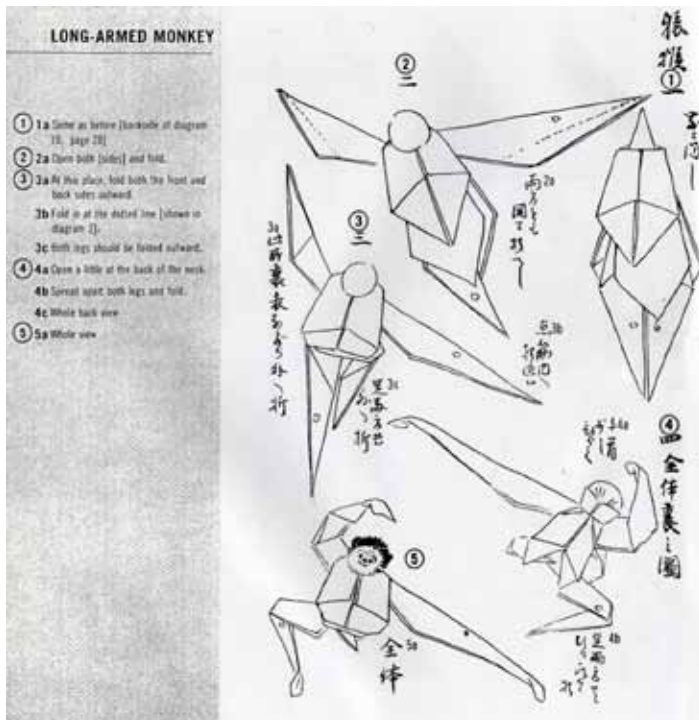
古典は、作家が作品の研究で発見した、最も包括的で歴史的
に重要な折り紙の作品のコレクションを図や説明文で紹介して
います。ここに提示された作品は、折り紙の歴史の学者により
集中的に調査されたものとなっています。

これは少なくとも十九世紀半ばのものと考えられている日本
の百科事典「カンノマド」(現在は失われているが)の補足の
写しです。

作家たちは、古典を見つけ、出版に向けて最初に翻訳する
という他に類を見ない経験をしてきました。作品の研究価値、美
しさ、有用性を維持し、高めるためにあらゆる努力がなされて
います。本文や図は、元のサイズと形式で再現されており、翻
訳はページの片面にあります。必要な編集上の注記とともに、
元の日本語版に対応したものになっています。ハンドカラーの

形は、可能な限り忠実な色のバランスで再現されています。
写本とその翻訳は、折り紙と当時の日本文化との関係につい
て、ほかに類を見ない包括的な洞察を示しています。図は、式
典、お祭り、贈り物および娯楽や娯楽の一形態としての折り紙
の作品を含んでおり、「古典の考察」では、多くの図の用途と
重要性が説明されています。

さらに、読者はトンボ、サル、詩人などの興味深い例(手本)
をその時代の特徴的な構成方法で構成することができるでしょ
う。加えて、読者が創造的な成果の満足感と折り紙の文化的お
よび歴史的意義のより深い認識の両方で報われることが望まれ
ます。

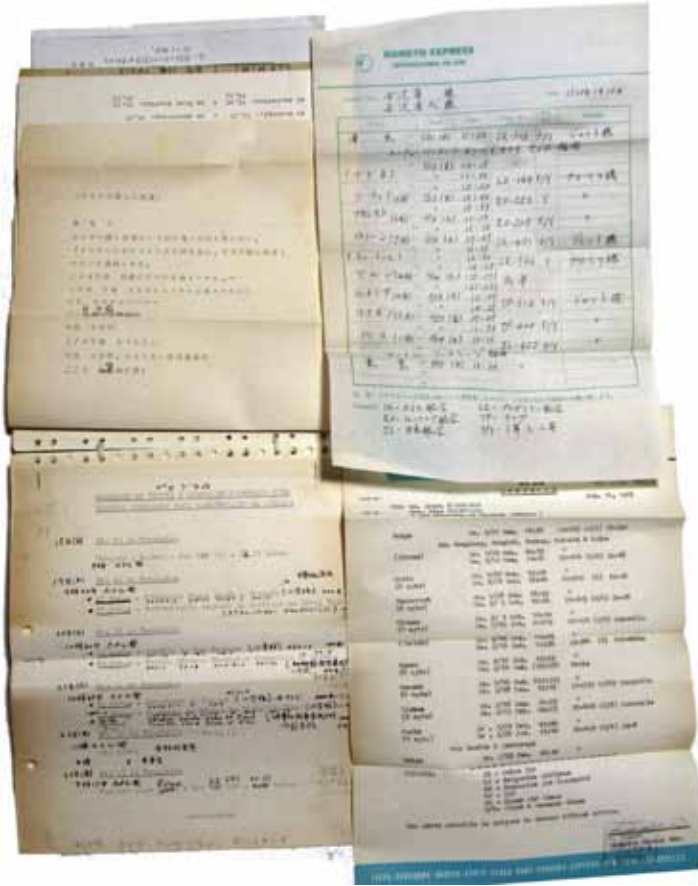


「A Japanese Paper-folding Classic」から

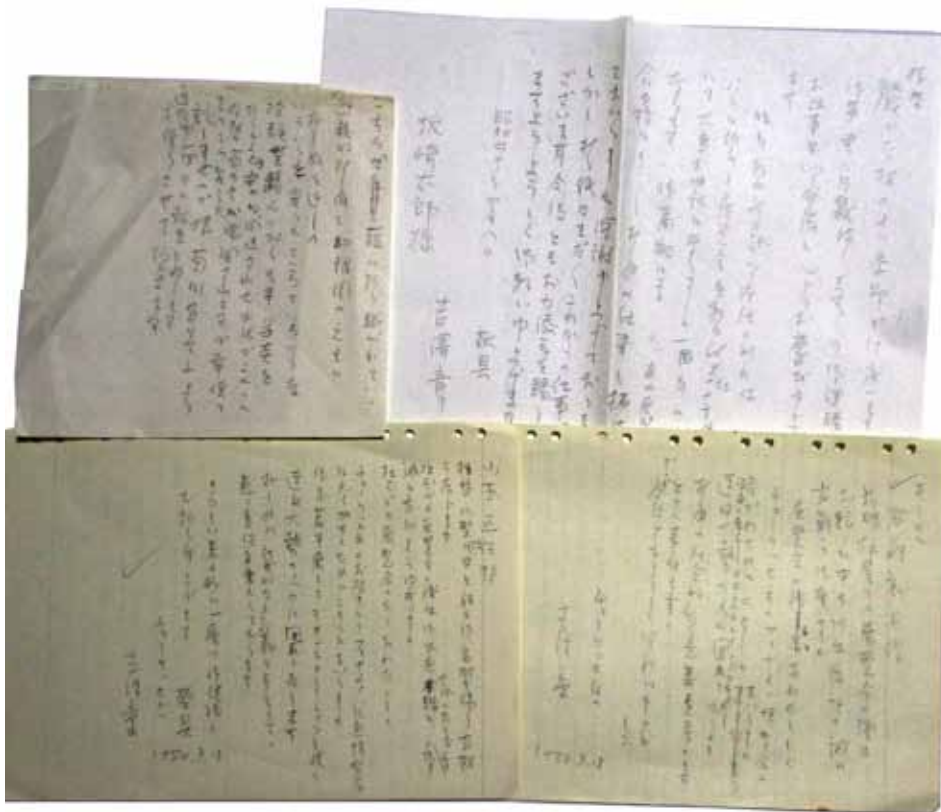
二 世界をめぐる

吉澤章は、多くの国を訪れました。第二次世界大戦で敗戦国となった日本。その傷も癒えない中、日本が国際社会と良好な関係を築くには、もっともつと他国に日本のこと、日本人のことを理解してもらう必要があります。吉澤の作り出す新しい創作折り紙は、この条件にまさにうってつけであったのです。日本の文化大使として吉澤章が果たした役割は、たいへん大きいものであります。

日本人が、まだ外国に行くには簡単ではなかった時代でしたから、当時の様子をすることは非常に価値があるものです。幸いなことに、吉澤章・喜代夫人は、旅行に際し詳細な記録を残していました。当時の記録の一部をここに掲載します。



各国へ訪れた時の旅行の行程表



吉澤章が書いた手紙の礼状の下書き

資料の中には、吉澤章が各国を訪問した際、お世話になった方々への礼状の下書きがいくつも見つかりました。吉澤章が、一人一人の方々の出会いや縁を大切にしていたことが、この資料からもよく分かります。

三 作品「セミ」

二〇二一年にテレビでも放映された「セミ」の作品。吉澤章は、この作品を完成させるのに二十年以上もかかったと語っています。どのような思いで作品作りに取り組んだのか、彼の言葉や夫人の日記を紐解きます。

「二つの作品が完成する時間はいろいろですよ。複雑なものでもスムーズに出来る事もありますし、作品によっては二十年以上かかることもありました。精魂を傾けて折り直し、作り直して。例えば「セミ」にしても、触覚から眼や口、音を出すところも、おしっこをするところも作ってあります。折るときには、何も考えないね。ヒツジを作る時はヒツジになりきって、そしてヒツジが生まれるんだから。それができたらね、たとえば何と言われようとへっちゃらなのよ。それほどの喜びは他にないもの。」

(吉澤章インタビューから)



一九六一年（昭和三十六年）十月三日（雨）

実物と全く同じに見える「虫」を折る事、もう数年来の念願であった。絶えずあたためられてきた創作の糸口がほぐれかけたのは、セミの声が朝からふりそぐ日のこと。それ以来もう今回で幾日になるか祈りつづけている。今年の夏は、格別な暑さが彼岸までした。秋彼岸ひがんは暑いものといわれているが、三百度を前後する日がこの日までした。

多美子をさそい「セミの子」を八幡様に探しに行つたのはそのはじまり。生きているセミの子を三つほどと抜け殻がらをとってかえた。夜中に脱皮しかけたセミのあわい緑のすきとおる羽を、三人で息をつめるようにして見守った。そのういういこと。その造形の神の技のすばらしいこと。その驚きと感激が今折っている種々の虫を折るきつかけとなった。

そのセミは翌朝うちで写真にとり、観泉寺の桜にとまらせて、もう一度写真にとろうとしたが自然にかえっていつてしまった。折り紙のセミの子とセミが残った。折り紙の作品については実際に見ればわかる事であるが、六本の足、はね、音の出るところまでが折られて、これは実物と一見ちがわないような写実的なものである。

折り紙としてすぐれた折り紙的造形であるのに、どうしてこんな複雑な実物にすぎるような作品を生み出すことに何日か苦労しているのかと。本人もこの忙しい急ぐ仕事のしかかっているのにこんな事をいつまでもしている事はと考えるが、今やりかけた時におかなければと言っているが、それは折り紙に対する世間一般の常識に応えるためのようなものである。

ピカソは抽象的な作品の構成に行きつまるとその度に写実に戻って制作したという事を何かで見た。写真が全て抽象、具象のもとになると考えるが、折り紙で不可能と考えられていた事が、此の頃では出来ないものがないようになってきた。

しかし私の驚く事はそういう写実的なものが生まれるまでの作品にも見事に構成されている事である。セミに六本の足がなくとも何のたりないところも感じさせない力、これは何なのでしようか。

それは精神的な要素であるといったところがセミはセミであるかぎり作品を創作するにあたっての心がまえでありましよう。

折り紙的立体とよぶ作品にまでもそのバランスはよくとれて、不自然さは少しも考えられないことに、写実以上の力をもつて迫ってくる。

セミ、セミの子、くわ形虫そして蜂^{はち}、蟻、羽を広げたカマキリと、虫の標本のように種々に生まれてきている。そして折り上がった時には心から喜び、神様ありがとうございますと心からのお礼を申し上げ、多美子さん、喜代さんありがとうございますと云ってくださる。私はそれに対してどれだけ労をねぎらう言葉で応えているかどうか。言葉には表しきれないものがある。

〔吉澤喜代日記〕から



義理の妹 菊川多美子と吉澤章



四 作品「キャピトルの狼」

「キャピトルの狼」は、イタリアのローマ、カピトリノ美術館にある像をモチーフとした作品です。ローマの建国神話に登場するロムルスとレムスという双子の兄弟は、オオカミによって育てられた、との逸話が残されています。吉澤章は、この難しい作品作りに取り組むことにしました。喜代夫人の日記からは、作品作りに何度か試行錯誤した様子がうかがえます。

吉澤喜代日記から

1988年(昭和63年)1月13日(水)

- ・キャピトルの狼制作する紙の裏打ち、大きさなど考える
- ・チャップマン様来日中とのことで、訪ねていらっしゃる

1月17日(日) ・辰試作 ・キャピトルの狼 子どもの紙

- ・塩川様お知らせをワープロ原稿でこしらえ、英文翻訳のことを話す モロッコの本のことを話す

1月18日(月) ・キャピトルの狼試作

- ・著作権輸出センター栗田様電話 英文の本について
- ・朝日カルチャーセンター池田様、第2と第4に変更

1月19日(火) ・キャピトルの狼試作 ・小田急石井さんから電話 ・妹背山の紙断つ ・会員に知らせ出す

1月20日(水) ・キャピトルの狼試作 ・ペローさんフランスに行ってきた挨拶

→キャピトルの狼の試作は、この後3月3日まで連日試作

4月13日(水)

- ・キャピトルの狼 寸法の割り出し ・毎日コミュニケーションズ小笠原様 ・テレビ朝日 ヒントでヒント村上様

4月15日(金)

- ・キャピトルの狼制作 →5月2日まで連日、狼の制作記述

5月3日(火)

- ・キャピトルの狼(こども)制作 →17日までこども制作記述

5月18日(水)

- ・キャピトルの狼の子どもの顔 →30日まで顔の制作記述

5月31日(火)

- ・キャピトルの狼の子ども
- ・三越大島様からニューヨーク三越レストランで30人ぐらの部屋 ・ベストジャパン前橋様 パスポートと航空券
- ・ピエールカルダンジャパン 田中様 山下様

6月2日~6月11日 章、ニューヨークで講習会

6月23日(木)

- ・キャピトルの狼の子ども制作 →7月1日まで子ども制作記述

7月3日(日)

- ・キャピトルの狼の子ども仕上げ

7月4日(月)

- ・バンクーバーで日本祭 10月6~8メインに展示、出演
- ・塩川様に本をお願いする ・横浜市国際交流協会
- ・キャピトルの狼仕上げ 夕方アトリエにて撮影(三組)
- ・児童会館原稿 夜9時速達にて発送



五 折り紙の起源

折り紙の起源について、吉澤章はいくつかの文書を残しています。ここには、一九五六年に「This is Japan」の中で、彼が外国人に向けて記した文章を和訳して掲載します。

吉澤 章

日本の折り紙の起源は知られていない。しかし、遠い昔に、紙が発見され、それが一般化した時、紙を折ることによっていろいろの形を作る芸術として自然に起こったことは信じられる。

折り紙は、儀式的意義を象徴化するために、国家神社の一致があつた時に始まつたといわれている。

沖繩の縄文字の場合と同様に、折り紙は儀式に關した伝授と記録のために用いられた。この種の折り紙は、切り込み折り紙と呼ばれ、折り紙と切り紙の結合したものである。

初期においては、折り紙と切り紙の区別はなかつた。しかし今日では、折り紙は切り紙と組み紙と区別されているが、その区別は、折り紙は紙を折ることを強調し、切り込みや描き込みは単に補助的な程度に用いるだけである。切り込み折り紙の名残とされている形代折り紙は、伊勢大神官の齋宮における一族に伝わっている。そしてそれは、特に神社使用のために作られた紙を用いた。正方形の紙を放射線状に切り、それを礼拝のための対象において安置する。そして、幣や神垂の様に神聖な儀式の執行がその折り紙によってなされるのである。

こうした清めの儀式に用いられた形代や、ひな祭りのための

紙ひな人形や紋切り型（家族の飾章のオリジナルパターン）は切り込み折り紙の芸術である。雌蝶と雄蝶、熨斗目録、多当折りは結婚式に用いられた。このような儀式用の折り紙は、今日小笠原流において教えられている。

遊戯折り紙は、平安時代に遡る。江戸時代においては、折つたものに描きこんだ切り込み折り紙が遊戯折り紙として初舞台を踏んだ。錦織や綴れ（模様付き錦織）が人形の衣装に用いられ、顔は胡粉で塗られ、その上に目や鼻が描かれている。

本質的に切り込みを用いない現代の折り紙は、室町時代以来発達した。江戸時代末に、ツル、カエル、舟、風船、奴、袴その他七十種類の形が発明された。これらは、折形、切据、畳紙と呼ばれた。この時代は、紙は非常に高価であつたので、折り紙が一般の人々の間に広く広まらなかつた。

明治時代には、千代紙に他の紙を裏打ちすることが流行し、これで多当や婦人のアクセサリーを入れる飾り箱が作られた。

遊戯折り紙は、複雑な変化補助や折り鶴八変化、獅子舞等を折るようになった。この種の折り紙は、いろいろの型が印刷された紙を用いる。すでに折られた折り紙の片側を開いて、異なつた折り目で再び折らなると、元の形とはまったく違つたものができる。この錦絵スタイル折り紙は、拳遊びや手の遊びに用いられた。

明治時代において、折り紙は幼稚園や小学校の低学年の手工



形代（かたしろ）

課程に認められた。大正初期以来、十五センチの正方形の色紙が市販され、娯楽と教育のための折り紙が著しく一般化した。

他方、昭和時代の初期以来、過去から受け継がれてきた折り紙の固定的、均一的、模倣的なことが批判されるようになった。

近年において、幾何学の基礎的原理の教導において折り紙の価値が新しく認識されるようになった。子どもは、折り紙の学習において第二次元と第三次元の形の関係をすぐ理解することができる。また、同時に注目されることは、折り紙は創造力を育成するためにその教育的価値が認められるようになった。

創作折り紙は事実、新しい芸術の分野として光を浴びるようになった。材料が紙であるこの芸術は、ただ補助的にカットを用いるだけで、厳格な制限のもとに折られる紙の面と線の相互関係によって、変幻自在の創造的な美を作り出す。これらの作品とは、大体において立体的である。紙の厚さ、大きさ、形、質は、折る主題によって異なる。

一メートルを超えるような大きな作品でさえ、霧を吹いて柔軟にした厚い紙で、面と辺の造形美を強調した作品をつくることのできるし、また、それぞれリアリスティックな、象徴的な、あるいは抽象的な方法で主題を表現することができる。



1960年代作品「親王飾り」



1959年（昭和34年）日本橋高島屋で開催した創作折り紙展の様子

六 吉澤章と創作折り紙（吉澤章の言葉から）

吉澤章は、折り紙を創作することについて、多くの言葉を残しています。それらの中から、いくつか雑誌に記された彼の言葉を拾ってみます。

青虫を折っていたときのこと、ある晩吉澤さんは夢を見た。青虫が一匹這っているのを眺めていると、それがバラバラと節ごとにほどけ、最後は一枚の紙になってしまったのだという。夢に現れるほどに、折り紙にかける思いが強かったということか。創作がうまく進まない、深夜に近くの八幡様の境内に行つて、「どうして折れないんだ！」と叫んだり、逆にうまく折れたときには、喜びの余り泣きながら小躍りしたという。

「本当に、私にはまだまだ、やらなくちゃいけないことがいっぱいあるね。いつか広い野原を買つてね、紙が漉けて、折り紙が折れて、外国から来た人も泊まつて一緒に仕事ができるような、折り紙村を作りたいの。そして日本をお手本にして、外国にもそれを作りたい。世界中の折り紙を集めて、折り紙のオリンピックもやりたいね。それをやらなくてどうするの。私一人ではできませんけど、みんながやればできるのよ。今それをやらなくてどうするの……。」

（『Fooga』か）



「黄鉄鉱の結晶と、折り紙のバラ。かたや何億年もかかって原子が並んでできた形。でも、どうです。同じでしょ。それは偶然じゃないんです。構造には必然性があるんです。円は円、三角は三角。幾何学的な、どうにもならない定理。誰もそういう領域から一歩もはみ出せないでしょ。音楽でも何でも同じでしょ。折り紙を折る人はみんな、一定の定理に支配された仲間なんだから、造形のために協力すべきよね。」

「私の作品に曲線を感じる？そうですよ。直線というのは存在しないんです。太陽の光だって光線じゃなく光子。そして全体は部分、部分は全体ですよ。私はヘルマン・ハーケン博士の理論も大好きですよ。もちろんこれは全部受け売りですけども、人間はそこへたどり着かなきゃいけないですよ。折り紙はそれを、ありふれた、普遍的な材料でやれるの。こんなに素晴らしいものが、どこにありますか。」

「折るときにはね、中心を最初からずらしておくの。中心線が大きすぎるの。中心というのはそういうものなの。単に幾何学的な点じゃないのよ。」

（『季刊』をる）から）



七 外国の方との交流

吉澤章は、多くの外国の方々との交流をしました。吉澤の展示会を通じて知り合いになる方もいれば、吉澤の作品をメディアで見かけた人などもあります。交流は、手紙や電話のやりとりもそうでしたし、吉澤の元を訪れる人もひっきりなしだったようです。

そのような中、面白い出会いから和紙の研究者として本を著す人もいました。彼女の名は、フランソワーズ・ペロー。フランス人。ここに、吉澤とペローさんの楽しくも温かいやりとりを紹介します。

フランソワーズ・ペロー

二十年以上前、ユーゴスラビアを旅したときのこと、旅先の子どもが紙を折って作られた野球帽をくれたんです。偶然、その何年か後、工芸学校の図書館で英語で書かれた本を見つけました。そこで折り紙という言葉その時初めて知りました。旅したときの思い出もあって、とても興味をそられたのです。それで、日本に行こうと決心をしました。初めての日本で、折り紙作家の吉澤章さんに折り紙を教えてくださいながら、和紙の産地や日本文化をいろいろ見て回ったのです。障子しょうじやふすまを見たのも初めて。私の頭の中にあつた和紙のイメージは字や絵を書くためだけのものでした。

一九七九年に三十歳で日本にやってきたペローさんは、その後日本の筑波大学に在籍し、和紙の研究を積み重ねていきます。そして一九九一年には「PAPERS JAPONAIS (和紙)」というフランス語の本を出版することになる。本の出版を祝いパーティーの席上、吉澤章はペローさんにお祝いの言葉を贈った。



吉澤 章

ペローさん、パピエ・ジャポネの上梓じょうしおめでとう。

貴方は、一九七九年ブリテイッシュ・オリガミ・ソサイエティの今は亡き、ロバート・ハービン氏に紹介され、初めて私に手紙を書きました。それは、日本の紙と折り紙に興味を持ち直に学びたいとの熱意からでした。

折り紙の基礎となる理論と実技指導、手漉すき和紙工場の見学、その間にあつた大きな折り紙の展示会など、充実した一ヶ月であつたと思います。折り紙が日本の紙に関わる端緒たんちよとなつたことは否いなめないでしょう。私と私の家族、近所の人には心からできる限りのことをして、暑い夏が過ぎました。

貴方あなたはいつたん帰国後、再び日本で学びたいという気持ちを抑えがたく、日本の留学の手続きを取るための推薦状すいせんじょうを書いて欲しいと手紙が来ました。提出期限も押し迫っていました。貴方の意志をご理解頂くために、最上の推薦状を書いて送り、又知人に紹介を頂いて文部省など何人か

の方にお願ひに上がりました。

その後はお存じの方も多いと思いますが、筑波大学芸術学部で朝倉先生のご指導を受けたわけです。そして折り紙は私の指導の元に勉強を続けました。折り紙は国際折り紙研究会や朝日カルチャーセンターの講座、そして個人的なレッスンも随分しました。時には大変熱心でしたが、決して良い生徒の時ばかりではありませんでした。

私は大切な時間を貴方のためにとって、待つていても現れず寂しい思いをさせられました。フランス人は大体そういうものですか、と聞くとそれは否定しましたが・・・。

さて、私は今年の秋はアメリカとカナダの人々に特別なカリキュラムで、日本紙を用い折り紙を教えるために派遣されます。一九九二年に二十二年ぶりの貴方の祖国の隣の国スペインで開かれる万国博覧会の日本政府展示部門第一室に「生なり」の文化を表現するに最もふさわしい日本の手漉きの紙を素材として、日本の原風景を折り紙で表現します。シエルターや設営の総ての部分も手漉きの紙が用いられます。日本の文化の深層を伝える重大な意図によるものですから、私の責任は大きいものです。一九五五年のオランダに於ける折り紙の画期的な個展と共に、日本の紙の持つ力をこれを機会にヨーロッパを始め世界の人々に知って頂ける展示になるでしょう。

これは、今後貴方にも関わりのあることになるでしょう。初心を忘れずお励みください。私はいつも貴方のお幸せと健康を心からお祈りしています。

一九九一年七月十日



「PAPIERS JAPONAIS」(邦題 日本の和紙)



外国の方々からの手紙

八 折り紙作者からの声

二〇〇五年（平成十七年）三月十四日、日本を始め、世界の国々に吉澤章が亡くなったニュースが流れました。メディアでの取り上げもそうですが、多くの折り紙作者からも弔意が寄せられました。

塩川誠 国際折り紙研究会

雑誌の編集部に勤めていた関係で、吉澤先生には折り紙の連載をお願いし、また書籍担当になってからは十冊ほどの著書を作りました。

ある日「脊椎動物の基本形は六角。正方形の対する角を中心に合わせて折ると六角形になるのですべての脊椎動物を折ることがができる。対角線を脊椎として両端が頭と尾、あとの四つの角が前脚、後ろ脚になる。」と話され、さらに「二枚の正方形の紙を重ねて、対角線の方角へ一枚ずらせると同じように角が六つになる。一枚で動物を折ると難しくなるけれど、二枚の正方形で前半身、後ろ半身を折って組み合わせると比較的易しく折ることができる。」と。

「折り紙読本Ⅱ」に載っている猫、ペガサス、ぞうなど二枚で折る動物の後ろ半身を作るとき、私はみぶるいするような感動を受けるのです。先生が「基礎折りA」と規定されるものをまず折って、二つに分かれた先の先端部分を引っ張るようにして折り方図にしたがってまとめると、一瞬にして動物の後ろ半身ができてしまう。その「基礎折りA」とは伝承折り紙「つる」そのものなのです。いつの頃からか、たくさんの人が数え切れない「つる」を折ってきて、その中に脊椎動物の後ろ半身がひそんでいることを見抜いた人が現れたことは奇跡というよりほ



かないと思います。

ある日、先生の仕事場におかれた手控えと思われる大きな紙に、一カ所から出た数々の線が更にたくさん分岐し、たくさん節に文字が書き込んであるのが目に入りました。「あ、これこそ先生がご自分に課されている折り紙による生命の系統図」とわかりました。

「折り紙を折るために神からつかわされた二本の手」と自ら話された手が、数万点ともいわれる貴重な作品をわれわれ人類のために遺されたのです。

ロバート・J・ラング(アメリカの物理学者 折り紙研究者)

吉澤章さんは、私たちすべてにとって、発想の源であり、活動の基準点でした。私がまだ若く、何とかして名を成したいと思っていたころアリス・グレイさんから、吉澤さんがセミを創作するのに二十年かかったという話を聞いて、「ふーん、私だったら二十年もいらぬぞ。」と思いました。そしてその場で創作を始め、自慢じまんの作品ができたので、私の最初の本に収録しました。ところが、何年か経つと、その作品の欠点が見えてきました。そこで私はもう一つの作品を創作しました。しかしまもなく、その作品にも弱点が目につくようになりました。それを繰り返す中で、二年前、日本折り紙学会のコンベンションに参加した折り、静岡市で実際のセミをじっくり観察して、もう一度創作を始めました。その結果が「静岡のセミ・作品番号44⁵」です。これでやっとけりがついたと思いました。

しかし、カレンダーを見れば、私がこの題材に取り組み始めてから二十五年が経っているではありませんか。私は結局吉澤さんより五年も長くかかってしまったわけです。

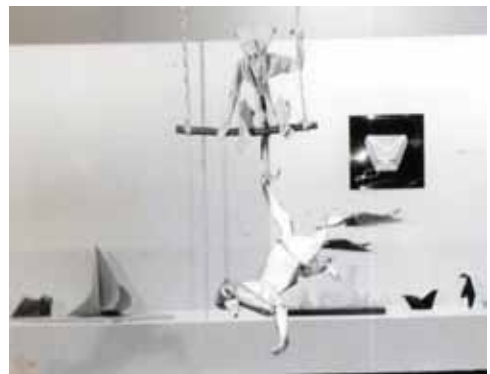
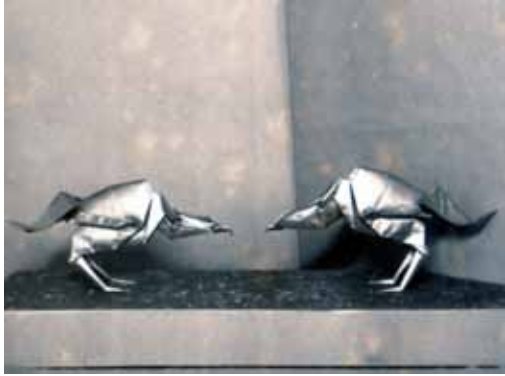
吉澤さんにとっては、折った形に生命が宿っているということが最も重要で、それだからこそ、彼の作品は今でも私たちを啓発し続けているのだと思います。

(「折り紙探偵団九十二号」から)



1950年、1960年代作品

作品編



1970、1980年代作品



1992年 セビリア万博





[年 表]

- 1911年（明治44年） 栃木県に生まれる。幼少の頃より折り紙に興味を持つ。
- 1926年（大正15年） 東京泰明実業補習学校卒業
- 1938年（昭和13年） 鉄工所に働きながら、本格的に折り紙の研究に入る
- 1950年（昭和25年） 教育的な折り紙の発表を契機として、「アサヒグラフ」掲載を皮切りに新聞、雑誌、展覧会、講習会にて折り紙を社会的に広める
- 1953年（昭和28年） G・レグマン氏から「カノマド」という折り紙の古典を探す依頼がある
- 1954年（昭和29年） 国際折り紙研究会創設。ユネスコ主催の学術工芸教育国際研究会議に出席。著書「新らしいおり紙藝術」も刊行
- 1955年（昭和30年） オランダのアムステルダム市立美術館において個展。画期的な造形美術として世界から注目される。その後、海外各国及び国内各地で展覧会を開催。
- 1957年（昭和32年） 著書「折り紙読本」を刊行。
- 1963年（昭和38年） 著書「たのしいおりがみ」が毎日出版文化賞を受賞。
- 1964年（昭和39年） 「何哉等草」の原本が朝日新聞大阪本社にて発見される。
- 1966年（昭和41年） から1991年
外務省及び国際交流基金から折り紙の講師として派遣され、世界数十カ国を訪問。国際交流に務める。現在世界各国にある折り紙の会設立の基礎を成す。
- 1971年（昭和46年） モービル児童文化賞受賞
- 1983年（昭和58年） 折り紙による文化普及に尽くしたことにより勲五等雙光旭日章を叙勲。
- 1984年（昭和59年） パリと東京において朝日新聞社とピエール・カルダン氏主催による創作折り紙個展開催。
- 1986年（昭和61年） 折り紙とその背景としての日本文化紹介に対し外務大臣賞を受賞。
- 1987年（昭和62年） イタリアのミラノ市の招聘により作品展。
- 1992年（平成4年） スペインのセビリア万国博覧会で日本政府館に原風景「日本の四季」を折り紙作品によって展示。
- 1993年（平成5年） フランスのパリ市・サンフロランタン市で特別展覧会を開催。
- 1995年から1998年 ドイツ3都市、アメリカ各地、スペインで作品展、講演。
- 2000年（平成12年） 国際交流基金によりオマーンへ派遣され、作品展と講演を開催。
- 2003年（平成15年） 上三川町で「吉澤章創作折り紙展」開催。
- 2005年（平成17年） 没 死去
-
- 2005年（平成17年） オーストリアのザルツブルクで「Masters Origami 展」出展。妻、喜代氏特別講演。
- 2007年（平成19年） ドイツのハンブルク美術館での招待、吉澤章作品展。ニューヨーク「Origami USA コンベンション」で妻、喜代氏講演。イスラエルのティコティン博物館で展覧会。

[参考文献]

- 吉澤章日記（1953年～1958年）
吉澤喜代日記（1961年～1993年）
吉澤夫妻海外出張の記録（1966年～1976年）
『This is Japan』NO.3（1955年 朝日新聞社）
『New Japan』vol.12（1960年 毎日新聞社）
「A Japanese Paper-folding Classic」（1961 ジュリア・ブロッサム、マーチン・ブロッサム）
「The World of Origami」（1965 Isao Honda）
「紙工芸 技法大辞典」（1974年 東陽出版）
「上三川町史 資料編近現代」（1980年 上三川町）
「季刊『民俗学』第16号」（1981年 国立民族学博物館）
「PAPIERS JAPONAIS（和紙）」（1991年 フランソワーズ・ペロー）
「季刊『をる』NO.5」（1994年 双樹舎）
「広報かみのかわ」（2003年 上三川町）
「いのち織り成す」—吉澤章折り紙展を前に—（下野新聞 2003年9月27日・10月12日記事）
「fooga vol.240」（2003年 株式会社コンパス・ポイント）
「折り紙探偵団92号」（2005年 日本折り紙学会）
「吉澤章 創作折り紙展」（2008年7月 吉澤章創作折り紙展事務局）
「紙パ技協誌68巻」（2014年 紙パピルス技術協会）
「Origamiの誕生—リリアン・オッペンハイマーによる普及活動を中心に」
（松浦英子 東洋大学大学院紀要）



作成・発行

上三川町教育委員会

上三川町教育研究所

協力

国際折り紙研究会

令和五年（二〇二三年）四月